

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22320021

研究課題名(和文)近代ロシア・プラトニズムの総合的研究

研究課題名(英文)Integrated study of modern Russian Platonism

研究代表者

杉浦 秀一(Shuichi, Sugiura)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：50196713

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 15,900,000円、(間接経費) 4,770,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ロシア・プラトニズムという観点から19-20世紀のロシアの文化史の流れを再構築することである。本研究では20世紀初頭の宗教哲学思想家たちを分析し、彼らが西欧で主流の実証主義への対抗的思潮に大きな関心を向けていたこと、また19世紀後半のソロヴィヨフの理念はロシア・プラトニズムの形成に影響を及ぼしたが、彼以前の19世紀前半にもプラトニズム受容の十分な前史があったことを明らかにした。したがってロシア・プラトニズムという問題枠組みは、従来の19-20世紀のロシア思想史の図式では整合的に理解し難かった諸思想の意義を理解し、ロシア文化史を再構築するための重要な導きの系であることを確認した。

研究成果の概要(英文)：It is the aim of this study to reconstruct the Russian modern cultural history of the 19th - 20th century from the perspective of Russian Platonism. As a result of this research it became clear that under the influence of Western anti-positivist thinkers the Russian thinkers of the beginning of 20 century uniquely processed western established approaches or framework in different ways, for example by displacement and replacement of them, or anticipated them rather than simply accepted them. And this study found that there was affluent prehistory of perceptions of Platonism in the first half of 19 century in Russia. Generally speaking, as a result of this study it became clear that the framework of the Russian Platonism is an important thread of guidance in order to reconsider the works of thinkers who have hitherto been difficult to understand within the established schematic understanding of intellectual and cultural history of Russia in the 19th -20th centuries.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・思想史

キーワード：ロシア プラトン 宗教哲学 ロシア正教 ロシア文学 ロシア詩学 文化史 ソロヴィヨフ

### 1. 研究開始当初の背景

ロシア文化の様々な部分においてプラトニズムが一定の役割を果たしていたことは、既に海外の先行研究において指摘されてきた。従来ロシア文化史叙述の枠組みを組み替え、ロシア文化史におけるプラトニズムの影響力をより包括的・具体的に検証するという本研究課題を設定するに至った。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、近現代ロシア文化の考察に対して新しい視点を導入することを念頭におきつつ、ロシア文化史の転換点である 19-20 世紀初頭のロシアの文化・芸術運動、政治・社会運動の特質を「プラトン」に着目して分析することである。

### 3. 研究の方法

本研究では、19 世紀前半と 19 世紀末-20 世紀初頭の 2 つの時期区分にもとづいて研究分担者ごとに分析をおこない、それを踏まえて、年 2 回の「プラトンとロシア」研究会において協働して検討した。

### 4. 研究成果

(1) 19 世紀前半のロシアにおける文学・思想とプラトニズム：プラトンに由来する「詩人追放論」は、古典主義詩やデカプリスト詩人の市民詩から、「個」の解放を志向するロマン主義詩へと移行というロシア文学史上の過渡期に大きな影響を及ぼしていたことを明らかにした。1830 年代のスタンケーヴィチ・サークルでの活動とプラトン思想に注目することにより、ベリンスキーがプラトン以来の観念論哲学と現実との関係についていち早く再考していたことを明らかにした。またキレエフスキーは、自分自身の思想の変遷の中で、シェリング哲学の図式を援用しつつも、ロシアからシェリングを引き離し、ロシア思想（正教）の歴史的根源としてプラトンを掠め取ったという見取図を提示した。チャアダーエフが、保守思想を哲学的・論理的に

説明する部分において、キリスト教思想と類縁性のあるプラトンの名を効果的に用いていたことを明らかにした。

(2) 19 世紀前半のロシア正教とプラトン：キリスト教とプラトニズムとの関係は、先行研究が言うほど単純ではないことが明らかになった。19 世紀前半のロシア神学大学出身の哲学者たちによるプラトン解釈は、自称プラトン主義者のフェスラーが提起した自由で自律的な哲学的信仰の主体の育成というモチーフを共有していたといえる。そこには、時代の旗印としての「啓蒙」の課題を、蒙昧からの知性の解放を神への信仰の覚醒と不可分のものとして理解する「宗教的啓蒙」というべき課題として了解する共通認識があった。その意味で、1814 年の神学大学学則に明記された「プラトン」の名前は、一方で、自由な宗教哲学的思考と信仰による生活実践に対する世俗権力からの封じ込めの圧力に抵抗しつつ、他方で、世俗社会での宗教的啓蒙に積極的に参与する姿勢の象徴として「大改革」時代にいたるまで神学大学・神学校出身の知識人たちの言説を鼓舞し続けていたことが明らかになった。

(3) ロシア正教会と府主教フィラレート：19 世紀のロシア正教会におけるプラトン主義の動向の背景を探るために、19 世紀の前半から中葉にかけて 40 年近くモスクワ府主教をつとめ、最も権威ある聖職者であったフィラレート(ドロズドフ 1782-1867)と、主にアレクサンドル 1 世時代の宗教政策および思想界とのかかわりについて検討した。その結果、総じていえば、ロシア正教会高位聖職者と同時代の帝国政府官僚との相互関係は、帝国統治の面で従来言われてきたような相互補完的な関係ではなく、むしろ緊張と矛盾に満ちた関係であることが明らかになり、その中心的な位置にあったのがモスクワ府主教フィラレートであったことが鮮明になった。

(4) E.トルベツコイのプラトン論：トル

ベツコイの『プラトン論』は、彼のソロヴィヨフ哲学への心酔と批判、プラトン哲学に対する共感と反感、法哲学者としての自分の基本的立場が交差して、極めて判りにくいものとなっている複雑な思想的背景を明らかにすることができた。以上の考察をふまえ、プラトンの「詩人追放論」を始めとする芸術論の問題が、トルベツコイの議論に大きな影響を与えていたはずであると予想できるので、トルベツコイの芸術論と彼の『プラトン論』との関係を解明することが今後の重要な課題として浮上してきている。

(5) ソロヴィヨフと同時代人および後継者の思想 トルストイ、ノヴゴロツェフ、ゼンコフスキー：トルストイとソロヴィヨフの両者の構想は、妥協が不可能なほど対立しており、ソロヴィヨフの晩年の大著『善の弁明』は、トルストイを否定することと自己の構想を叙述することという2つの側面をもっていたが、この両者は不可分であったことを指摘した。ソロヴィヨフにとって終末論と反キリスト論、そして「死者の復活」の理念こそ彼の晩年の思想の核心であったことを明らかにし、これに対してノヴゴロツェフは、ソロヴィヨフの核心的理念を共有しておらず、むしろ彼は地上世界における「無窮の人格の理念」を自己の思想的核としており、この理念にもとづいて法治国家を構想していたことを指摘した。だが同時代のマルクス主義に代表される「イデア抜きの上の王国」を拒否する点では、ソロヴィヨフとノヴゴロツェフの間にはある種の「重なり」を見いだすことができ、この点にこそロシア・プラトニズムの底流的構えを確認することができる。またトルベツコイは、ソロヴィヨフの後継者たることを標榜していたとはいえ、実はソロヴィヨフの核心的思想ともいふべき「終末の哲学」を削ぎ落としてしまっていた。さらに亡命思想家ゼンコフスキーの大著『キリスト教哲学の基礎』における連続

創造説、歴史的存在論といった「存在」論によって全一哲学、ソフィア論を拒否した道筋を明らかにし、それはソロヴィヨフの後継者グループのなかで E.トルベツコイのモチーフと重なる部分が大いことを示唆した。

(6) ロシア・ルネサンスの思想とプラトニズム：20世紀初頭のロシア・ルネサンスの時代の思想にはプラトニズムへの回帰という現象が広く見られるが、こうした現象の意味を明らかにするため、ヴァチエスラフ・イワノフ、ロースキー、セルゲイ・ブルガーコフ、ベルジャーエフ、フランクという5人の思想家を取り上げ、20世紀初頭のロシアの宗教思想が共有する構造的な特性を解明するとともに、それとプラトニズムとの関わりについて検討した。総じていえば、一見きわめて多様で、互いに対立しあうように見えるロシア・ルネサンスのさまざまな思想は、2つの潜在的な志向という観点から読み解くと、いずれも類似した構造を持っていることが明らかとなる。そして、この時代のロシア思想が常にプラトニズムに回帰しようとする志向を持つのは、彼らが根源的な実在の世界をコスモス化しようとする志向を持ち、そのために必要な超越的な秩序のモデルをプラトンのイデア論の内に見出したからである。本研究は、ロシア・ルネサンスの思想におけるプラトニズムの意味をそのような形で明らかにした。

(7) 20世紀初頭のロシア思想家たちとプラトン哲学：フロレンスキイによれば、プラトン哲学は、イデア的、神的なものが、まさにイデア性や神的性質を保ちながら、フィジカルで個別的な物へと受肉することを示す、ある種の「オカルティズム」であるということが明らかになった。エルンは、西欧的なプラトン哲学の体系化・形而上学化を退け、身体を持った個別な人格のなかに、イデア的なものが受肉する点を重視したことを指摘した。《イデア的なものはかならず個別的な身体へと受肉する》という、ロシア特有のこうしたプ

ラトン理解は、一般的なロシア宗教思想の系譜からはあきらかに外れた理論のなかにも読み取ることができることを解明した。ヘルマン・コーエンの弟子である哲学者セゼマンは、認識主観と客体（物）との二元論の乗り越えを図ったことを指摘した。またバフチンにとって、プラトンの対話篇は彼の対話理論を裏付ける最古の言葉のジャンルのひとつであり、プラトン哲学の体系を理論的に抽出しようとする新カント派は厳しい批判の対象となったことを明らかにした。「ロシア・プラトニズム」とでも呼ぶべきこうした独自のプラトン理解を言語の問題と結びつけ、独特の哲学を構想したのがローセフであることを指摘した。つまり「名」はすぐれてイデア的でありながら、同時に身体化・実在化（＝受肉）されたものなのである。総じて言えば、彼らにとって、言葉はつねに、身体化・物質化された神・イデアにほかならないことを指摘した。

#### （ 8 ）本研究の意義と今後の課題

ウラジーミル・ソロヴィヨフを筆頭としたロシアの思想家たち、とりわけ、ノヴゴロツェフ、セルゲイおよびエヴゲニイ・トルベツコーイ兄弟、ヴァチスラフ・イワーノフ、ロツスキー、セルゲイ・ブルガーコフ、ベルチャーエフ、フロレンスキイ、エルンといった思想家たちは、西欧の合理主義ないし実証主義（ロシアにおけるその亜流）に対抗して、観念論の復権の必要性を主張しつつ、その主たる関心を哲学から宗教へと移行させ、最終的に「ロシア独自」の宗教的・哲学的体系を構築したとされている。しかしながら、本研究ではこれらの思想家たちの分析の結果、そのような西欧での主流の実証主義的世界理解に対する対抗的思潮は、必ずしもロシアだけでなく西欧でも登場しており、ロシアの思想家たちは、このような西欧の対抗的思潮（例えばフッサール、ベルグソンなど）に大きな関心を向けていたことが明らかになった。これら 20 世紀初頭のロシアの思想

家たちは、西欧で台頭した実証主義的世界観に満足することなく、実証主義が看過してきた超越的領域にも視線を向けることにより、より全体的な新しい世界観を構築しようとした。彼らは、西欧の反実証主義的な思想家たちの動向を視野に入れながらも、西欧で提唱された新しい方法をたんに受け入れるというよりも、超越的領域を問題化する枠組みとして「プラトニズム」に光をあてることで、それら西欧の反実証主義的思潮を様々なかたちで改作し、その問題設定の仕方をズラしたり、再配置したりして、時にはそれらを先取りするかたちで、西欧の反実証主義とは異なるアプローチを模索するなかで独自の宗教哲学を構築しようとしていたのである。このような思想的方向性は、ソ連時代の思想家たち、例えば、シペート、バフチン、ローセフによって継承されていった。それゆえ、このような思想的方向性を総じて「ロシア・プラトニズム」と呼ぶことができる。もっとも、本研究の成果として、19 世紀後半のウラジーミル・ソロヴィヨフの諸理念はその後の「ロシア・プラトニズム」の形成に強い影響力を及ぼしたとはいえ、彼をこの方向の創始者だとみなすべきではないことも明らかになった。なぜなら、彼以前の 19 世紀前半のロシアにおいてもプラトニズムの受容の十分に豊かな前史があったことが明らかにされたからである。とりわけ、「愛智会」のメンバー、ヴェネヴィーチノフ、プーシキン、スタンケーヴィチ、チュッチェフ、キレエフスキー、チャアダーエフ、ナデージュチン、正教神学者フィラレート（ドロズドフ）のような思想家たちが西欧での啓蒙思想からロマン主義への移行とドイツ観念論の展開という文脈の中で「プラトニズム」の重要性をいち早く理解していた。その背景には、第 1 に、プラトニズムが、ロシア正教独自の宗教哲学を構築しようとした神学者、宗教思想家たちの問題意識にとって有力な理論的根拠を提

供したと同時に、第2に、デカリプリストの暴力的変革の試みの挫折以降、ドイツ観念論、特にシェリングの影響を受けながら、ロシアの現実の社会変革の課題を文芸や詩的想像力の課題と結びつけて解決しようとした19世紀前半のロシアの詩人・文学者・批評家たちにとってプラトニズムが超越的アイデアと現世的現実とを相関させるうえで大きな靈感を与えてくれたという事情があったことが明らかになった。総じていえば、本研究の成果として、ロシア・プラトニズムという問題枠組みは、従来の19-20世紀のロシア思想史・文化史の図式的理解では整合的に理解することができなかった思想家たちの著作の意義を深く理解し、ロシア文化史を再構築するうえで重要な導きの糸であることを確認することができた。

今後の課題として残された点としては、18世紀後半の状況、19世紀半ば以降のプラトニズムの動向分析、ソ連時代や亡命した思想家たちへの継承の問題がある。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計8件)

杉浦秀一、E. トルベツコイ『ウラジーミル・ソロヴィヨフの世界観』の考察、メディア・コミュニケーション研究、査読有、第64号、2013年、1-20頁。

北見諭、象徴秩序の彼方へ：ベルジャーエフの思想における自由と人格の概念をめぐって、スラヴ研究、査読有、第60号、2013年、1-28頁。

貝澤哉、哄笑される悲劇、あるいは小説は存在しない：ミハイル・パフチンの小説論における「悲劇」と「笑い」について、早稲田現代文芸研究、査読無、第3号、2013年、36-49頁。

下里俊行、ナデージュチンによるプラトンの哲学体系の再構築とその哲学的的文

脈、ロシア史研究、査読有、第89号、2012年、3-22頁。

貝澤哉、詩的言語における身体の問題：ロシア・フォルマリズムの詩学をめぐって、スラヴ研究、査読有、第58号、2011年、1-28頁。

北見諭、ブルガーコフの言語哲学におけるカント批判のモチーフについて、神戸外大論叢、査読無、第62巻第3号、2011年、49-73頁。

下里俊行、あるロシア正教神学生の自己形成史　ニコライ・ナデージュチンの出会いと読書、スラヴ研究、査読有、第58号、2011年、91-122頁。

坂庭淳史、チュツチェフとチャアダーエフ：歴史、システム、カオス、ロシア文化研究、査読無、第18号、2011年、31-44頁。

[学会発表](計0件)

[図書](計5件)

坂庭淳史、「チュツチェフの詩『白鳥』をめぐって　『二重の無底』とは何か?」、坂庭淳史、高柳聡子、桜井厚二、上野理恵、粕谷典子、神岡理恵子、田中沙希『ロシア研究の未来：文化の根源を見つめ、展開を見とおす：井桁貞義教授退職記念論集』、「ロシア研究の未来」刊行委員会、2013年、全221頁。

貝澤哉、野中進、中村唯史編著『再考ロシア・フォルマリズム　言語・メディア・知覚』、せりか書房、2012年、全229頁。

貝澤哉、「ポストモダニズムとユートピア／アンチユートピア：現代ロシアにおける『近代』の超克」、塩川伸明、小松久男、沼野充義編『ユーラシア世界3：記憶とユートピア』、東京大学出版会、2012年、77-100頁。(全253頁)

北見諭「言語と世界構成：ロシア宗教ルネサンスの言語論とフォルマリズム」、貝澤

哉、野中進、中村唯史編『再考 ロシア・フォルマリズム：言語・メディア・知覚』せりか書房、2012年、110-126頁。(全225頁)

貝澤哉、「マンデリシュターム：吃音化する言葉の『ざわめき』」、宇野邦一、堀千晶、芳川泰久編『ドゥルーズ：千の文学』、2011年、397-405頁。(全506頁)

〔その他〕

ホームページ等

[https://twitter.com/russian\\_plato](https://twitter.com/russian_plato)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

杉浦 秀一(SUGIURA, Shuichi)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：50196713

### (2) 研究分担者

山田 吉二郎(YAMADA, Kichijiro)

北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：40091516

根村 亮(NEMURA, Ryo)

新潟工科大学・工学部・教授

研究者番号：40242367

下里 俊行(SHIMOSATO, Toshiyuki)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：80262393

兔内 勇津流(TONAI, Yuzuru)

北海道大学・スラブ研究センター・准教授  
研究者番号：50271672

貝澤 哉(KAIZAWA, Hajime)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30247267

北見 諭(KITAMI, Satoshi)

神戸市外国語大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00298118

坂庭 淳史(SAKANIWA, Atsushi)

早稲田大学・文学学術院・准教授

研究者番号：80329044

### (3) 連携研究者

川名 隆史(KAWANA, Takashi)

東京国際大学・経済学部・教授

研究者番号：60169737

室井 禎之(MUROI, Yoshiyuki)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：60182143

### (4) 研究協力者

渡辺 圭(WATANABE, Kei)

千葉大学・非常勤講師

研究者番号：なし

今仁 直人(IMANI, Naoto)

研究者番号：なし

堀越 しげ子(HORIKOSHI, Shigeko)

北海道大学・非常勤講師

研究者番号：なし

堀江 広行(HORIE, Hiroyuki)

研究者番号：なし

斎藤 祥平(SAITO, Shohei)

北海道大学・大学院文学研究科博士課程

研究者番号：なし

山本 健三(YAMAMOTO, Kenso)

長安大学校外国語学部講師

研究者番号：なし